

◆ 東京都新宿都税事務所長賞 ◆

「私たちの暮らしと税金」

新宿区立西早稲田中学校 3年 天田 華月

今年の正月。石川県金沢市にある祖父母の家。そこで私は大地震を経験した。マグニチュードは七・六。周りすべてが大きく揺れて、とても怖かったし、不安になった。祖父母の家ではガラスや瓦などが割れ、壁にひびが入った。近くの道路ではマンホールが飛び出していた。震源に近く、特に大きく揺れた能登半島では多くの人が亡くなり、また、家を失ってしまうなど甚大な被害が出た。

しかし、震災後まもなく、飛び出していたマンホールはコーンで囲われ、被害の大きかった地域には消防や警察、自衛隊の人たちが救助に向かった。避難所には支援物資や食料が届けられていた。ニュースでそれを見た私はほっとした。地震が起きてからずっと感じていた不安がその時軽くなった。

考えてみると、これらはすべて税金によって成り立っている。今回の能登半島地震だけではない。台風による洪水や土砂崩れ、大雨による浸水。火山の噴火。今までに起こったたくさんの災害によって私たちの日常は壊され、そのたびに再生を遂げてきた。その活動、そして、被災者の暮らしを支えてきたのが税金なのだ。

災害と税金について調べたところ、東日本大震災の際には「復興税」が設けられ、復興のための資金となったと分かった。

復興税は所得税や法人税、住民税に上乗せされて徴収されるもので、それはつまりこれまでより余計に国にお金を取られるということになる。それには、好きなものが買えなくなったり、遊びに行くためのお金がなくなったりするなど、マイナスの面が見えるように私は思った。

これまで私は、消費税ぐらいでしか税金とは関わってこなかったし、関心もなかった。正直税金を煩わしいとさえ思っていた。だから、消費税が八パーセントから十パーセントになったときには、自分のお金が今までより減ってしまうことに不満があった。

しかし、私は今、災害大国日本で暮らす私たちの暮らしにとって税金は必要不可欠なものであると実感させられた。避難、復興は税金なしにはありえないものだとしんみりとして経験した。そんな今なら、漫画を買うときの十パーセントにマイナスの感情を抱くだけでなく、それが大切で、尊いものに思える。

いざという時に救いの手を差し伸べ、災害から私たちを守り、復興への道を切り開くことは税金の役割の一つだ。また税金は、日本の、あるいは世界の誰かの暮らしとなり、私たちの未来を形作る一ピースでもあるのだ。

税金を煩わしく感じること、不満に思うことは、これからもきっとあるだろう。それでも、私たちが税金を納めることで成り立っている暮らしもどこかに有り続けることを忘れてはならない。今日の、明日の、私たちの豊かな暮らしは、税金が静かに、しかし力強く支え続けているのだ。